

【研究論文】

英語の強勢について（その9）

On English Stress（9）

田 中 章
Akira TANAKA

まず、(138a) の *ànticipatòry* [←*anticipation*, *anticipate*]、*àrticulatòry* [←*articulation*, *articulate*]、*gèsticulatòry* [←*gesticulation*, *gesticulate*] であるが、派生は次のようになる。

(140) *ànticipatòry*、*àrticulatòry*、*gèsticulatòry*

Line 0	Project:L	(x	x	x	(x	(x	x	Avoid (x (OR
		H	L	L	H	H	L	
	Edge:LLL	vacuous						
	ICC:L	(x	(x	x	(x	(x	x	Avoid (x (OR
		H	L	L	H	H	L	
	Head:L	x	x		x	x		
		(x	(x	x	(x	(x	x	
		H	L	L	H	H	L	
Line 1	SC	vacuous						
	Edge: LRL	x	(x		x	x		
		(x	(x	x	(x	(x	x	
		H	L	L	H	H	L	

Head:L						
		x				
	x	(x		x	x	
	(x	(x	x	(x	(x	x
	H	L	L	H	H	L

S (m)						
		x				
	x	(x		x	x	
	(x	(x	x	(x	(x	x
	H	L	L	L	H	L

SD						
		x				
	x	(x			x	
	(x	(x	x	x	(x	x
	H	L	L	L	H	L

R						
		x				
	x	(x			x	
	(x	(x	x	x	(x	x
	H	L	L	L	H	L

[ə]

この派生では、語頭の音節と語末から二番目と三番目の音節が重音節なので、Project:Lが適用される。その際、回避制約 (Avoid (x () が無視される (overridden)。Edge:LLLは空虚に適用される。次にICC:Lが適用されるが、再び、回避制約 (Avoid (x () が無視される。

このようにして生じた4個の構成素の主要部を示すためHead:Lが適用される。line 1ではまず、SCが空虚に適用される。次に、line 0で生じた4個の主要部のうち、どれが主強勢を担うかを示すためにEdge:LRLとHead:Lが適用される。さらに、語末から三番目の長音節を短音にするためにS(m)が適用される (S (m) については (その7) 注10参照)。最後に、この音節を「あいまい母音 (schwa)」にするため、SDと「弱化 (Reduction)」¹⁵が適用され、正しいアクセントが生成される。

次は、(138b) の confiscatòry [←cònfiscátion, confiscate]、compénsatòry [←còmpeñsátion, còmpeñsàte]、obsérvatòry [←òbservátion, observe] を扱うが、派生は次のようになる。

(141) confiscatòry, compénsatòry, obsérvatòry

Line 0	Project:L	x	(x	x	(x	x	(x (Avoided (twice)
		H	H	H	H	L	
	Edge:LLL	need not apply					
	ICC:L	vacuous					
	Head:L		x		x		
		x	(x	x	(x	x	
		H	H	H	H	L	
Line 1	SC	vacuous					
	Edge:LLL		(x		x		
		x	(x	x	(x	x	
		H	H	H	H	L	
	Head:L		x		x		
		x	(x	x	(x	x	
		H	H	H	H	L	
	SOSW		x		x		
		x	(x	x	(x	x	
		H	H	L	H	L	
	R		x		x		
		x	(x	x	(x	x	
		H	H	L	H	L	

[ə]

この派生では、語末の音節以外すべて重音節なので、Project:Lが適用される。その際、回避制約 (Avoid (x () が二度適用される。Edge:LLLは、語頭の音節にはアクセントが付与されないため適

用する必要はない。次にICC:Lは空虚に適用される。このようにして生じた2個の構成素の主要部を示すためHead:Lが適用される。line 1ではまず、SCが空虚に適用される。次に、line 0で生じた2個の主要部のうち、どちらが主強勢を担うかを示すためにEdge:LLLとHead:Lが適用される。さらに、語末から三番目の長音節を短音にするためにSOSW (SOSWについては(その5)(97)参照)が適用される。最後に、この音節を「あいまい母音 (schwa)」にするため、Rが適用され、正しいアクセントが生成される。

次は、(138c) のdefámatòry [←dèfamátion, defáme] であるが、派生は次のようになる。

(142) defámatòry

Line 0	Project:L	x	(x	x	(x	x	(x (Avoided
		L	H	H	H	L	
	Edge:LLL	need not apply					
	ICC:L	vacuous					
	Head:L	x	x		x		
		x	(x	x	(x	x	
		L	H	H	H	L	
Line 1	SC		x	x	x		
		x	(x	x	(x	x	
		L	H	H	H	L	
	Edge: LLL		(x	x	x		
		x	(x	x	(x	x	
		L	H	H	H	L	
	Head:L		x				
			(x	x	x		
		x	(x	x	(x	x	
		L	H	L	H	L	

SOSW		x				
		(x	x	x		
	x	(x	x	(x	x	
	L	H	L	H	L	

SD		x				
		(x		x		
	x	(x	x	(x	x	
	L	H	L	H	L	

R		x				
		(x		x		
	x	(x	x	(x	x	
	L	H	L	H	L	

[ə]

この派生では、語頭の音節と語頭から二番目の音節および語末から二番目の音節が重音節なので、Project:Lが適用される。その際、回避制約 (Avoid (x () が適用される。Edge:LLLは語頭の音節にアクセントがないため適用する必要はない。次にICC:Lは空虚に適用される。このようにして生じた2個の構成素の主要部を示すためHead:Lが適用される。line 1ではまず、SCが適用される。次に、このようにして生じた3個の主要部のうち、どれが主強勢を担うかを示すためにEdge:LLLとHead:Lが適用される。さらに、語末から三番目の長音を短音にするためにSOSWが適用される。最後に、この音節を、あいまい母音にするため、SDとRが適用され、正しいアクセントが生成される。

次は (138c) の *explánatòry* [←*èxplanación*, *expláin*]、*decláratòry* [←*dèclaración*, *decláre*] であるが、派生は (141) と全く同じになる。

次に (138d) の *réspiratòry* [←*respíre*, *rèspiración*]、*óbligatòry* [←*oblíge*, *òbligación*] であるが派生は次のようになる。

(143) *réspiratòry*, *óbligatòry*

Line 0	Project:L	x	(x	x	(x	x	(x (Avoided (twice)
		H	H	H	H	L	
	Edge:LLL	(x	(x	x	(x	x	Avoid (x (OR
		H	H	H	H	L	

	ICC:L	vacuous				
	Head:L	x	x		x	
		(x	(x	x	(x	x
		H	H	H	H	L
Line 1	SC	x	x	x	x	
		(x	(x	x	(x	x
		H	H	H	H	L
	Edge: LLL	(x	x	x	x	
		(x	(x	x	(x	x
		H	H	H	H	L
	Head:L	x				
		(x	x	x	x	
		(x	(x	x	(x	x
		H	H	H	H	L
	S	x				
		(x	x	x	x	
		(x	(x	x	(x	x
		H	L	H	H	L
	SOSW	x				
		(x	x	x	x	
		(x	(x	x	(x	x
		H	L	L	H	L
	SD	x				
		(x			x	
		(x	x	x	(x	x
		H	L	L	H	L

R	x				
	(x			x	
	(x	x	x	(x	x
	H	L	L	H	L
			[ə]		

この派生では、語末の音節以外すべて重音節なので、Project:Lが適用される。その際、回避制約 (Avoid (x () が二度適用される。次に語頭の音節にアクセントが付与されるためEdge:LLLが適用されるが、回避制約 (Avoid (x () は無視される (overridden)。次にICC:Lは空虚に適用される。このようにして生じた3個の構成素の主要部を示すためHead:Lが適用される。line 1ではまず、SCが適用される。次に、このようにして生じた4個の主要部のうち、どれが主強勢を担うかを示すためにEdge:LLLとHead:Lが適用される。さらに、語頭から二番目と語末から三番目の長音を短音にするために、まずSが語頭から二番目の音節に適用され、次いでSOSWが語頭から三番目の音節に適用される。なお、SがSOSWより先に適用されるとしたが、これはHV p. 263においてSはSOSWより先に適用されるとしていることに従った。但し、「循環的/緋循環的」という概念はHVの枠組みでは用いないので、本稿でも用いていない。最後に、語末から三番目の音節を、あいまい母音にするため、SDとRが適用され、正しいアクセントが生成される。

それから (138d) の *pacificatòry* [←*pàcificátion*, *pácify*] の派生は次のようになる。

(144) *pacificatòry*

Line 0	Project:L	x	x	(x	(x	(x	x	Avoid(x(OR(twice)
		L	L	H	H	H	L	
	Edge:LRL	x	(x	(x	(x	(x	x	Avoid (x (OR
		L	L	H	H	H	L	
	ICC:L	irrelevant						
	Head:L	x	x	x	x			
		x	(x	(x	(x	(x	x	
		L	L	H	H	H	L	

Line 1	SC	vacuous					
Edge: LLL	x	(x	x	x	x		
	x	(x	(x	(x	(x	x	
	L	L	H	H	H	L	
Head:L		x					
	x	(x	x	x	x		
	x	(x	(x	(x	(x	x	
	L	L	H	H	H	L	
S(m) (twice)		x					
	x	(x	x	x	x		
	x	(x	(x	(x	(x	x	
	L	L	L	L	H	L	
SD		x					
		(x			x		
	x	(x	x	x	(x	x	
	L	L	L	L	H	L	
R		x					
		(x			x		
	x	(x	x	x	(x	x	
	L	L	L	L	H	L	

[ə]

[ə]

この派生では、語頭から三番目の音節、語末から二番目と三番目の音節が重音節なので、Project:Lが適用される。その際、回避制約 (Avoid (x () が二度無視される (overridden)。次に語頭から二番目の音節にアクセントが付与されるのでEdge:LRLが適用されるが、この際にも回避制約 (Avoid (x () は無視される (overridden)。ICC:Lはirrelevantである。このようにして生じた4個の構成素の主要部を示すためHead:Lが適用される。line 1ではまず、SCが空虚に適用される。次に、このようにしてで生じた4個の主要部のうち、どれが主強勢を担うかを示すためにEdge:LLLとHead:Lが適用される。さらに、語頭から三番目の長音節と語末から三番目の長音を短音にするためにS (m) が二度適用される。次に、これらの二つの音節にSDが適用され、最後に、語末から三

番目の音節を「あいまい母音 (schwa)」にするため、Rが適用され、正しいアクセントが生成される。

次は (138e) の *apprôbatòry* [←*apprôbate*, *àpprobátion*] であるが、派生は (141) と全く同じになる。
 (138e) の *víbratòry* [←*víbrate*, *vibrátion*]、*rótatòry* [←*rótate*, *rotátion*] の派生は次のようになる。

(145) *víbratòry*, *rótatòry*

Line 0	Project:L	(x	x	(x	x	(x (Avoided
		H	H	H	L	
	Edge:LLL	vacuous				
	ICC:L	vacuous				
	Head:L	x		x		
		(x	x	(x	x	
		H	H	H	L	
Line 1	SC	x	x	x		
		(x	x	(x	x	
		H	H	H	L	
	Edge:LLL	(x	x	x		
		(x	x	(x	x	
		H	H	H	L	
	Head:L	x				
		(x	x	x		
		(x	x	(x	x	
		H	H	H	L	
	SOSW	x				
		(x	x	x		
		(x	x	(x	x	
		H	L	H	L	

R	x				
	(x			x	
	(x	x	(x	x	
	H	L	H	L	
					[ə]

この派生では、語末の音節を除いてすべて重音節なので、Project:Lが適用されるが、その際、回避制約 (Avoid (x () が適用される。Edge:LLLとICC:Lは空虚に適用される。次に、このようにして生じた2個の構成素の主要部を示すためにHead:Lが適用される。line 1では、まずSCが適用され、語頭から二番目の音節のライン1上に星印が付与される。このようにして生じた3個の主要部のうち、どれが主強勢を担うかを示すために、Edge:LLLとHead:Lが適用される。次に語頭から二番目の音節を短音にするためにSOSWが適用される。最後に、この音節をあいまい母音にするためにRが適用されて正しいアクセントが生成される。

次は、(139a) の agglutinative [← agglutinàte] であるが、派生は次のようになる。

(146) agglutinative

Line 0	Project:L	x	(x	x	(x	x	(x # Avoided, (x (
		H	H	L	H	H	Avoided
	Edge:LLL	need not apply					
	ICC:L	vacuous					
	Head:L		x		x		
		x	(x	x	(x	x	
		H	H	L	H	H	

Line 1	SC	vacuous				
	Edge:LLL		(x		x	
		x	(x	x	(x	x
		H	H	L	H	H
	Head:L		x			
			(x		x	
		x	(x	x	(x	x
		H	H	L	H	H
	S		x			
			(x		x	
		x	(x	x	(x	x
		H	H	L	L	H
	SD		x			
			(x			
		x	(x	x	x	x
		H	H	L	L	H
	R		x			
			(x			
		x	(x	x	x	x
		H	H	L	L	H

[ə]

この派生では、語頭から三番目の音節（すなわち、語末から三番目の音節）を除いてすべて重音節なので、Project:Lが適用されるが、その際、回避制約（Avoid (x #, Avoid (x () が適用される。Edge:LLLは、語頭の音節にはアクセントが付与されないため適用する必要はない。ICC:Lは空虚に適用される。次に、このようにして生じた2個の構成素の主要部を示すためにHead:Lが適用される。line 1では、まずSCが空虚に適用される。それから、line 0で生じた2個の主要部のうち、どちらが主強勢を担うかを示すために、Edge:LLLとHead:Lが適用される。次に語末から二番目の音節を短音にするためにSが適用される。最後に、この音節を曖昧母音にするためにSDとRが適用されて正しいアクセントが生成される。

ここで、HVがp. 262で述べている-active Ruleを適用する場合について考える。この規則は、-at-の上のline 0上での星印を削除して、-at-を強勢を担うことができないようにする(non-stress-bearing)規則である。この規則が適用されると、-at-が持っていたアクセントが右に移る。以下で、派生を示すことにする。ただし、line 1でSを適用した段階からである。

(147)(= (146))

S		x			
		(x		x	
	x	(x	x	(x	x
	H	H	L	L	H
-ative Rule		x			
		(x		.	x
	x	(x	x	(.	x
	H	H	L	L	H
R		x			
		(x		.	x
	x	(x	x	(.	x
	H	H	L	L	H

[ə]

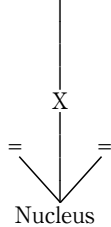
派生(147)で、Sが適用されて、語末から二番目の音節が短音節になった後で、-ative Ruleが適用される。そうすると、構成素はアクセントを持たなければならないので、アクセントが右の音節上に移る。そして、最後に、Rが適用されて語末から二番目の音節があいまい母音になる。ここで注意すべきは、(146)でSDを適用してもアクセントは移らないということである。SDはライン1以上の星印を削除するので、派生(146)から分かるように、語末から二番目の音節のライン1上の星印と、左境界が消えるのみであるからである。しかし、(147)では-active Ruleが、ライン0上の星印を削除するので、アクセントが右に移ってしまう。従って、agglutinativeが生成されることになる。したがって、言語事実に反するので、HVの-active Ruleは適用されないことになる。

注

15この「弱化」はHV p. 240では次のように定義されている。

Reduction (=HV, p. 240, (35))

$[-\text{cons}] \rightarrow [\emptyset]$ / ————



where X is not dominated by a line 1 asterisk

参考文献（追加）

- （その1）新潟経営大学紀要 第14号 2008年3月 37頁～53頁
- （その2）新潟経営大学紀要 第15号 2009年3月 15頁～29頁
- （その3）新潟経営大学紀要 第16号 2010年3月 13頁～25頁
- （その4）新潟経営大学紀要 第17号 2011年3月 9頁～21頁
- （その5）新潟経営大学紀要 第18号 2012年3月 1頁～15頁
- （その6）新潟経営大学紀要 第20号 2014年3月 3頁～16頁
- （その7）新潟経営大学紀要 第21号 2015年3月 1頁～14頁
- （その8）新潟経営大学紀要 第22号 2016年3月 13頁～25頁

